

1930年代中盤に見る「類似宗教」論

——「迷信」論との関係に着目して——

遠藤 高志

キーワード 類似宗教、迷信、宗教復興、宗教団体法、1936年

1. 問題提起と意義

「俗信」は英語の superstition、あるいはドイツ語の Aberglaube の訳語とされている。「俗信」の用語を初めて体系的に論じ、その意味について言及した人物としては、柳田国男が挙げられる〔柳田、1934〕。真野俊和は、現在「俗信」として研究対象となっているものとして、「予兆、卜占、禁忌、呪術」の4分類、及びそれらに関連する習俗信仰を挙げる〔真野、1976〕。一方、「俗信」以外の訳語としては他に、「迷信」が挙げられる¹。「迷信」が価値判断を伴う用語であるのに対し、「俗信」は価値中立的な用語であり、これが、後者が学術用語として好ましいとされる主たる理由である²。

「迷信」については、既に明治期に加藤玄智が「迷信と正信を判別する標準は、一言を以て之を云へば時代知識と云ふの外無いのである、則ちその時代々に於ける科学哲学の理論より道德法律の制裁に至る迄、一切是等の時代知識即ち其時代々々の一切の人文現象は、迷信と宗教を判つ標準になるのである」〔加藤、1912：55〕と指摘した通り、ある特定の社会、または時代に左右される概

1 一例として、加藤玄智〔1912〕が挙げられる。加藤は、「宗教」と「迷信」の区別について論じる際、「則ち英仏の言葉では迷信は Superstition と云ひ宗教は之を Religion と云ふてをる、又独逸の言葉では迷信のことを Aberglaube と云ひ宗教のことを Religion と云ふてをる」〔加藤、1912：36〕と説明する。このように、superstition と Aberglaube との間の概念の差異を意識した論説は見られない。なお、「迷信」と類似した用語としては、「妄信」が挙げられる〔坪井、1898〕。

2 井之口章次は、民俗学の立場から「俗信」の研究を行うが、「迷信という言葉は、主観的であって基準のおきどころもない。したがって学術用語としては、なるべく使わないほうがよい」〔井之口、1970：5〕と指摘している。

念、すなわち、きわめて主観的な概念であることは免れ得ない。その意味で、加藤の指摘は的を射たものであると言えよう。現在でも、「迷信」に関する書籍は、実用書を中心に出版されているが、その定義は、きわめて漠としたものである。何をもって「迷信」とするか、その定義を定めようとしても、誰もが納得できる答えを見いだせない原因は、その非客観性のためであろう。その意味で、「迷信」は実体のない概念であると言える。

しかし、社会、時代に影響される概念だからこそ、「迷信」の語がどのような社会的文脈で使用されてきたかについて分析することは、その概念の歴史を考える上で、意義あるものと思われる。「迷信」概念の歴史を検討することは、その対概念でもある「信仰」の概念の追究へと繋がると考えられるためである。「迷信」という実体のない概念も、ある時代には、その世相を反映し、一時的にその姿があぶり出される。しかし、次章で指摘するように、近代「迷信」論に着目し、その時代的、社会的背景を考慮しつつ扱った研究は殆ど見られない。そのような中で、川村邦光〔2006〕の研究が、その数少ない事例と言える³。このように、「迷信」概念史は、まだ研究の余地のある分野であると思われる。

ところで、非客観性を有する用語としては、「迷信」のほかに、「類似宗教」、「擬似宗教」、「邪教」などの用語が挙げられる。これらの用語は、「教」の語が示す通り、概して、宗教集団に対して用いられるものであるが、「迷信」との類縁性を有する用語である。私の目的は、「迷信」研究史をその社会的文脈から捉え直し、概念の形成過程を探ることにあるが、目下の所、「類似宗教」と呼ばれる種々の新宗教系の教団の取締が強化された、1936年（昭和11）前後の歴史に着目している。なぜならば、「類似宗教」あるいは「邪教」と銘打った書籍の出版が集中している時期が、1936年であり、これらの書籍において、「迷信」と関連付けた記述がなされているためである。また、公権力による出版物としては、司法省調査課による『宗教類似教団に随伴する犯罪形態の考察』

3 川村は、日本の近代化に際して、民衆の「〈迷信〉的な信仰・慣習」〔川村、2006：37〕が、マスメディアや教育の分野でクローズアップされ、嘲笑、恐怖の対象となることで「民俗の知」が「制度の知」への転換に利用されたと述べる。

が挙げられる。更に加えるならば、雑誌『科学ペン』では「迷信邪教批判特輯」と銘打った企画が、前年には、雑誌『文藝春秋』6月号において「新興宗教批判座談会」という企画が組まれている。同年に出版された書籍は〈表1〉に挙げた通りだが、その多くが大東出版社であるにせよ、わずか1年という短い期間に、同じ意図を持った書籍が多数出版されたのには、何らかの必然性が感じられる⁴。これらの書籍の出版の背景には、「類似宗教」が大きな社会問題となっていた事情があると考えられる。以下、当時の社会背景を考慮に入れつつ分析していきたい。そして、今後の「迷信」研究の足がかりとしたい。

〈表1〉1936年に出版された「類似宗教」あるいは「迷信」関連の書籍とその出版日

月	日	著 者	書 名	出 版 社
1	22	島影盟	邪教・妖術を裸にする	森田書房
2	18	仏教社会学院編	新興類似宗教批判	大東出版社
5	20	島影盟、廣木勇郎	現代人の観たる擬似宗教の真相	大東出版社
8	18	中村古峽	迷信に陥るまで：擬似宗教の心理的批判	大東出版社
9	10	岩野真雄編	仏教より観たる正信迷信の区別	大東出版社
12	10	戸坂潤	思想と風俗 ⁵	三笠書房
12	26	高津正道	邪教新論	北斗書房

2. 「迷信」研究史の見直し

これまで、「迷信」研究史はどのような展開を見せてきたのか。ここでは、特に戦後における研究に注目し、その問題点を指摘する。戦後の体系的な「迷信」研究として、第1に挙げられるのが、1947年（昭和22）と1950（昭和25）に実施された、「迷信調査協議会」（以下「協議会」）による全国の実態調査、及び、それに伴う「迷信」の定義に関する研究である。

4 大東出版社からは、翌1937年（昭和12）にも、林屋友次郎が『信仰確立の基礎：正信の宗教と迷信の宗教』を著しており、同社の「迷信」への関心の高さが窺える（なお、同書は未確認のため、今回は考察の対象から外した）。

5 今回は、『戸坂潤全集』第4巻（1977年発行）を参考にした。

協議会発足の背景には、文化国家としての日本を建設するための、国民生活の科学化という目的意識があった。そのために、「迷信の現状、蔓延状況及びその穏健合理的な払拭方法発見の基礎資料を得るためそれに関する調査を行うことを企画した」〔迷信調査協議会、1979：3〕。

1949年（昭和24）に開催された、協議会の委員達による座談会によると、「今日の思想、科学等によってその説明が根拠づけられ得なくて、しかも実際の生活に相当大きな実害を伴っているような民衆の信仰を迷信」〔座談会、1952：97〕とする岸本英夫の定義を議論の俎上にのせているが、委員の間で確固たる定義が確立しているとは言い難い⁶。

「調査」という性質上、いかなる現象を「迷信」とすべきか、事前に仮説的な定義付けを行うことは、方法論上当然のものと言える。上述の座談会にも参加した、今野圓輔と日野寿一〔1952〕は、過去の研究者による定義を多数引用し、その定義について言及する。特に前者は、戦後、幾つかの「迷信」関連の書籍を出版しているが、協議会の調査報告として収録された「文化遺産と迷信」という論文の中で、従来の迷信論を以下の5種に分類する〔今野、1952：59〕。

- ① 普通にいわれる「迷信」の箇々の代表的な事項を取り挙げ、文献によってその起源や変遷を論じ、これに啓蒙的な立場から現代的解説を試みたもの。
- ② 宗教的立場から「迷信」といわれるもののうち、信仰関係の現象、奇蹟などを論究したもの。
- ③ 純粹に社会事情として取挙げた人類学、民俗学及び民族学的論考。
- ④ 一般的な自然科学的立場及び各種の医学、薬学、暦学を中心とした天文学者などが、いわゆる迷信の箇々の現象を取り挙げてこれに自然科学的検討を加え、迷信めいたものの非科学性、不合理性を解説したもの。
- ⑤ 自然科学的立場から迷信の淫祠邪教性を強調したもの。

6 例えば、今野圓輔は、生活上の黙示すべからざる実害を伴うものを「迷信」として扱うべきと主張するが、日野寿一は、あくまで基準を「因果関係」に限定し、簡潔な定義をすべきと主張する〔迷信調査協議会、1952〕。

今野の関心は、「迷信」をいかに定義するかにあったため、「誰がいかなる定義をなしていた」という議論に止まり、各々の定義がなされた時代的、社会的背景への考慮に欠けており、「迷信」論が展開された社会的文脈についての扱いはきわめて薄いものとなっている。先述の通り、協議会の目的は、「国民生活の科学化のための迷信の実態調査」であり、換言すれば、「現在流布している「迷信」の「共時的」な理解である。「通時的」な理解は、あくまで二義的な扱いである。しかし、問題は、このような傾向が、今野の研究に限らず他の「迷信」研究にも該当することである。ゆえに、今回私は、1930年代中盤の「迷信」論に時期を限定し、その特殊性に注目し、その実態を探りたい。

3. 「類似宗教」の定義をめぐる問題

冒頭でも触れた通り、今回、私が分析の対象に取り上げる年代は、1936年(昭和11)前後であるが、この時期に、大きな社会問題となった用語として、「類似宗教」が挙げられる。以下、議論を「類似宗教」に移す。

「類似宗教」の語が一般に用いられるようになった契機は、1919年(大正8)3月3日、文部省宗教局が警視庁道庁府県に対して発行した、「宗教及之ニ類スル行為ヲ為ス者ノ行動通報方ノ件」における、以下の文言によると言われている⁷。

神佛道基督教等ノ教宗派ニ属セズシテ宗教類似ノ行為ヲ為ス者及神仏道基督教ニ属スル宗教教師ノ行動ニシテ公安其他風俗等ニ関シテハ特ニ注意ヲ要スル者有之候ハ御調査ノ上其都度御通報相成様致度依命此段及通牒候也
〔宗教行政研究会、1934：247〕

おそらく、この「宗教類似」の語句が、「類似宗教」の基になったと思われるが、世間では、「類似宗教」はどの程度認知されていたのだろうか。公権力による使用については、近年、牧之内友が、戦前の文部省による宗教政策について詳細な研究を行っている。牧之内は、公権力が既に大正期から、宗教法、

7 小関紹夫〔1934〕などが指摘するところである。

宗教団体法をめぐる議論において、度々「類似宗教」について言及していることを示している〔牧之内、2003〕⁸。一方、書籍レベルでは、1930年代に至るまでは、「類似宗教」の語は、ほとんど見られない。学術的には、どのような位置付けを与えられていたのか、以下、幾つか例を挙げる。

(1) 小関紹夫の「類似宗教」理解

小関紹夫は、「宗教研究」第11巻第6号中で、「類似宗教団体の現勢とその分析」と銘打った論文を著し、「類似宗教」の成立背景、定義について言及する。小関は、「類似宗教とは、非公認にして宗教行政上の対象となり居らざる宗教の謂ひ」〔小関、1934：126〕と定義し、「非公認とは形式的には閣議並に勅裁に依る主務（文部）大臣の許可を得ざる処のもの」〔小関、1934、126〕と説明する。

また、小関は「類似宗教」の語の成立過程についても言及する。すなわち、従来「宗教類似団体」あるいは「宗教類似行為者」と称していたものが、行政上以外の宗教（神道、仏教、道教、キリスト教以外の諸宗教団体）を包括的に指称するため、「類似宗教行為者」、「類似宗教団体」と呼ぶに至ったと言う。

以上の小関の主張からは、「類似宗教」は、理念上においては、公認宗教と区別するための暫定的な概念であったことが窺える。「類似宗教を凡て所謂インチキ宗教と見るは誤りである」〔小関、1934：127〕という一文が、このことを象徴する。

(2) 司法省刑事局による「類似宗教」理解

他方、時代が下って、1942年（昭和17）に司法省刑事局が著した、『最近に於ける類似宗教運動に就て』（思想研究資料特輯第96号、以下『特輯』）中における「類似宗教」概念について言及する。『特輯』は、その名の通り「類似宗教」を法的見地から検討したものであり、以下のように定義する。

8 「類似宗教」に関する先行研究としては、後述する渡辺治〔1979〕などによるものが挙げられる。牧之内は、彼等の学説を参考にしつつ、自説を展開する。

類似宗教とは外見上常に礼拜等の如き所謂宗教的行為を随伴するも、該行為の本質を形成する教義其の他に於て、国家、社会の安寧秩序を害し又は害するものである。右にして誤りなくば、

(一) 当該宗教の公認、非公認或は既成、新興の如何と問はず

(二) 結社、集団等の如き団体的行為たると個人的行為たるとに差異なく

(三) 俗に、所謂宗教的行為であれば足り、広く迷信、加持、祈祷等をも包含し

(四) 苟くも、其の本質に於て治安維持法、其の他の特別法を包摂する広義の刑法の対象となるもの〔社会問題資料研究会、1974：5〕

ここでは、「類似宗教」は公認、非公認に関わらず、国家、社会の安寧秩序を妨げる宗教的行為として規定されている。

以上、小関と『特輯』における「類似宗教」理解について簡単に述べた。両者とも法的見地からのアプローチとして点で共通するが、前者が「公認－非公認」の図式であるのに対し、後者は「社会の安寧秩序を乱すか否か」を「類似宗教」の判断基準と見なしている。このように、小関と司法省刑事局の学説との間には、8年の隔たりがあるが、その間に、以上のような「類似宗教」の位置付けに変化が生じたと考えられる。

ちなみに、今回私が分析対象とした時代について触れると、1936年（昭和11）6月に開催された地方長官会議における、文部大臣、平生鈞三郎の発言中に「類似宗教」の語が登場する。一例として以下に挙げる。

近時類似宗教行為者益々多きを加へ往々にして公安風俗を害するものあるは洵に遺憾とする所であります。之れ一面社会の情勢に因るものでありませうが他面純正なる宗教心啓培の不足に基因するものと謂はねばなりません。〔平生、1936：5〕

この文章の後には、宗教団体法を制定し、健全な宗教の発達を促すという論調が続くが、平生の発言からは、「公安風俗」を乱すものが多いとしながらも、決して「類似宗教」＝反社会的、という図式ではないことは明白である。それでは、「非公認」から「社会の安寧秩序の妨害」への、「類似宗教」

観念の転換の背景として、どのようなものが考えられるのだろうか。次章では、当時の社会背景について簡単に触れる。

4. 時代背景

ここでは、今回分析の対象とした、1930年代中盤へと至るまでの社会背景について簡単に触れる。

(1) 公権力の宗教への期待

まず指摘できるのが、公権力の宗教への期待である。近代日本の宗教教育に対する態度としては、1899年（明治32）に公布された「一般ノ教育ヲ宗教以外ニ特立セシムル件」（文部省訓令第十二号）が挙げられる。

一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フ事ヲ許ササルヘシ〔宗教行政研究会、1934：295〕

このように、学校における宗教教育に関しては、厳密な禁止規定が存在していた。

しかし、昭和期に入ると、状況が変化する。1935年（昭和10）、文部省普通学務局長であった河原春作は、宗教教育の必要性を主張する。

近時学校教育には宗教教育が必要であるといふ声が盛んになりましたが、これとても特定の宗派的宗教を学校で教育するといふ考へよりも信念を鞏固にするとか、宗教的情操を涵養することが人格の陶冶の上に必要であると叫ばれてゐるものと存するのであります。〔河原、1935：2〕

事実、同年、文部次官から各地方長官宛に宗教的情操に関する通牒が公布されている。そこでは、「学校ニ於テ宗派的教育ヲ施スコトハ絶対ニ之ヲ許サザルモ人格ノ陶冶ニ資スル為学校教育ヲ通ジテ宗教的情操ノ涵養ヲ図ルハ極メテ必要ナリ」〔河原、1935：4〕と、勿論『教育勅語』に反する教育は禁止されているものの、宗教教育について、一定の理解を示した内容となっている。

なお、同通牒では、「正シキ信仰ハ之を尊重スルト共ニ苟モ公序良俗ヲ害フガ如キ迷信ハ之ヲ打破スルニカムベシ」〔河原、1935：4〕と「迷信」にも言及している。

(2) 「宗教復興」

次に取り上げるべき問題は、「宗教復興（仏教復興）」の潮流である。なお、昭和初期の「宗教復興」の問題については、近年、大谷栄一が詳細な研究を行っており〔大谷、2005〕、以下、同氏の研究を参考にしつつ論を進めていく。

「宗教復興」という言葉が用いられ始めたのは、1934年（昭和9）5月頃であり、『中外日報』昭和9年5月2日号に「宗教復興」と題された記事に端を発すると、大谷は指摘する。その潮流の先駆けとなったのが、友松圓諦のラジオ講演、「法句経講義」である。

越智道順は、『「宗教復興」論概観 附「宗教復興論」文献』（1934年）を著し、友松の業績を、次のように評価する⁹。

（友松は、1934年）二月十六日の教学新聞紙上において「仏教復興」の辞を厳呼して道破してゐる。氏こそは単に仏教復興の立て役者としてのみならず、この流行語の造辞者として永く記念されよう。〔越智、1934：7〕（括弧内は引用者による）

そして、「宗教復興」の背景として、以下の点を挙げる。即ち、①ラジオ講座の新設とその恒常的設置、②諸新聞の宗教欄の復活もしくは創設、③仏教書の稀有の売れ行きに伴う出版界の活躍および雑誌での宗教関係記事の増加、④宗教講演会への聴講者大衆の殺到、⑤類似宗教の夥しい数の文部省への届出、⑥図書館における宗教書貸し出し数の著しい増加、である。

越智は、友松の助手をしていた経験があることから、この主張は客観性に

9 上述の越智の文献において、真野正順、森戸辰男、三木清等の「宗教復興」論が取り上げられており、当時の「宗教復興」の流行ぶりが窺われる。学術雑誌『宗教研究』においても、1934年（昭和9）に「日本的宗教の検討」と銘打った企画が組まれており、「宗教復興」への関心が高まっていたと言える。先述の小関の論文〔小関、1934〕も、同企画に寄せられたものである。

欠けるとの批判もできよう。しかし、前述のラジオ講演が好評を博した事実から、友松が「宗教復興」の潮流の先導的役割を担ったと言って差し支えないだろう。

ここで注目すべき点は、越智が「類似宗教の届出数の増加」を、「宗教復興」の要因の一つに挙げていることである。「類似宗教」の流行と「宗教復興」との相関関係が感じられる。

(3) 宗教団体法

以下では、1939年（昭和14）に公布、翌1940年（昭和15）に施行された、宗教団体法について触れる。同法の意図するところとして、井上恵行は、「宗教法規の整備統一」、「宗教法規の整備拡充」、「宗教団体に対する保護・監督の強化」の3点を挙げる〔井上、1983：203〕。つまり、宗教と国家との関係を統一的、体系的な法制度によって確立しようという意図の下に成立した法律が、同法なのであるが、このような動きは、既に明治期から存在していた。すなわち、1899年（明治32）の第一次宗教法案、1927年（昭和2）の第二次宗教法案、1929年（昭和4）の第一次宗教団体法案である¹⁰。

1939年（昭和14）に出版された、『宗教団体法解説』（深谷善三郎編）は、「政府解説纂輯」と銘打っており、政府の公式見解と一致するものと位置付けることができる。同法において、「類似宗教」はどのように位置付けられているのか。当時の文部大臣、荒木貞夫は、以下のように説明する。

新興宗教団体、即ち所謂類似宗教団体に関する規定としては、本法（宗教団体法）第二十三条乃至第二十五条¹¹があるが、此の新興宗教団体に対しては、従来専ら警察取締にのみ任せて来たけれども、現下の思想界の実情

10 これらの法案が否決された主たる理由は、大日本帝国憲法第28条の「信教ノ自由」が制限されるためであった。

11 条文を挙げると、第23条は「宗教団体ニ非ズシテ宗教ノ教義ノ宣布及儀式ノ執行ヲ為ス結社（以下宗教結社ト称ス）ヲ組織シタルトキハ代表者ニ於テ規則ヲ定メ十四日以内ニ地方長官ニ届出ヅルコトヲ要ス届出事項ニ変更ヲ生ジタルトキ亦同ジ」、第25条は「第十六条乃至第十八条及第二十条第一項ノ規定（＝監督規定）ハ宗教結社又ハ其ノ代表者若ハ布教者ニ付之ヲ準用ス」〔深谷、1939：125、132〕（＝監督規定）は引用者による）である。

に鑑み、是が設立に当っては届出を為さしめて、監督に遺憾なきを期し、一方其の善良なるものには発達をし得るやうにしたのである〔深谷、1939：14〕（括弧内は引用者による）

また、宗教局長であった松尾長造は、「特ニ此際本法ノ制定実施ヲ必要トスル理由」として、第一に「我国に於ける人心の安定、宗教を基礎としての教化、淫祠邪教の取締等」〔深谷、1939：15〕であると説明する。

従来警察が担ってきた「類似宗教」の取締、あるいは「淫祠邪教」の撲滅が、同法の意図する所であった。ところで、1935年（昭和10）12月には、同法案綱領が宗教制度調査会に提出されている。この時期は、同法にとっても大きな意味を持つと同時に、「類似宗教」概念、そして、それに付随する「迷信」概念にとっても、一つの転換点であったと言える。先述の通り、従来「類似宗教」として処理されてきた領域が、「宗教結社」と改称されることで、宗教行政の俎上に乗ったことが、このことを端的に示している。その意味で、1930年代中盤を取り扱うことは、一定の意義を有するものと思われる。

5. 新宗教関連の諸事件と「類似宗教」観

武田道生〔1988〕は、1935年（昭和10）までの、新宗教弾圧の問題を、「淫祠邪教観」という視点から扱っている。ここで同氏は、1935年を境に、その性格が変わっていると指摘する。確かに、同年末に発生した第二次大本教事件は、治安維持法が新宗教系教団に適用された初めての事件である¹²。井上順孝は、『新宗教事典』に収録された「法との摩擦」という項において、法と新宗教、という観点から論じている〔井上、1990〕。同論文における、井上作成の表によると、大正年間から1934年（昭和9）には第一次大本教事件など、年間2、3件程度に止まっていた新宗教系諸教団関係の事件が、翌年末、第二次大本教事件を境に、年間10件前後に増加している。

奥平康弘は、治安維持法の歴史について研究するが、当時の既成宗教、及び

12 渡辺治〔1979〕などが指摘するところである。

新宗教が、社会的に大きな意味を持つに至った要因として、戦時非常体制の強化による、民心の不安、そして宗教的な救いへの要求を挙げる。そして、宗教団体の取締について、以下のように述べる。

公権力からみて、宗教警察上のなんらかの手をうつことが必要視された。

しかし、単に消極的に淫祠邪教を取締るだけではなく、まもなく「国家精神総動員」運動として統合されてゆくような、戦時へのイデオロギー統制の見地からも、宗教組織への国家的介入が要請されていたのであった。〔奥平、2006：235〕

このように、第二次大本教事件に端を発する新宗教系教団をめぐる事件の背景には、宗教観の変容が存在していたと評価して差し支えないだろう。

ここで話題を「類似宗教」に戻す。渡辺治〔1979〕は、1936年（昭和11）に発生した、ひとのみち教団事件を契機に、「類似宗教」概念が変容したと述べる。つまり、大本教などの諸教団とは異なり、ひとのみち教団は、当時教派神道十三派の一つとして「公認」宗教の立場にあった、扶桑教の傘下で活動を行っていたことが、大きな要因になったと指摘する。3章において、小関紹夫の例〔1934〕で示した通り、当時「類似宗教」は、「非公認の宗教」として捉えられていた感がある。ゆえに渡辺は、公認教団及び、その傘下の教会取締りという目的が、「類似宗教」概念の拡大解釈に繋がったと主張する。

（教団規制を志向する）内務省・司法省にとっては、宗教行政の形式－管轄にもとづく類似宗教概念は不都合極まりないものであった。そこで類似宗教概念の転換が求められた訳である。類似宗教とは邪教である、それは公認・非公認の別を問わない、これが、新たな類似宗教概念となった。〔渡辺、1979：144〕（括弧内は引用者による）

すなわち、従来「形式」に則って理解されてきた「類似宗教」概念が、ひとのみち教団事件によって、「実態」に即した概念として理解、使用されるに至ったのである。1930年代中盤は、「類似宗教」概念の転換期であったと言える。

6. 新聞記事に見る「類似宗教」論

以上で述べてきたものは、主として公権力、あるいは法の観点からの「類似宗教」論である。社会的文脈、すなわち世間一般においては、「類似宗教」はどのように論じられていたのだろうか。

川村邦光は、「〈迷信〉は、マス・メディアによって暴きたてられることによってその姿を現わし、また文明開化と対照されることによってその輪郭をはっきりとさせてきたといえる」〔川村、2006：41〕と、マスメディアによる「迷信」観念への影響力について言及する。扱う時代が異なるものの、このような川村の視点は、本研究にとって非常に参考になるものである。ゆえに今回は、当時の新聞記事を資料に検討する。資料として、『東京朝日新聞』（縮刷版、以下『朝日新聞』）の1935年（昭和10）12月から翌年12月にかけての、宗教事件に関する記事を選択した。勿論、新聞記事には、各々の新聞社、記者の意図によって、多少の偏りがあることは否めない。今回挙げる『朝日新聞』中の記事も、当時の国内の世論をそのまま表していると判断するのは早急に過ぎるが、一新聞社の論説として、社会に対して一定の相互作用を持っていたものと思われる。

上記期間中に発生した、主な宗教関連の事件を挙げると以下の通りである。

- ・第二次大本教事件
- ・救世軍の内紛
- ・日蓮宗住職推挙に関わる買収騒動
- ・島津ハル狂信事件
- ・神政龍神会事件
- ・ひとのみち教団検挙

わずか1年余りの間に、以上の如き宗教事件が勃発し、その多くが公権力によって検挙されている。『朝日新聞』の紙上では、これらの諸教団が「邪教」、あるいは「インチキ宗教」などとして批判されている。

紙上では、「類似宗教」は、どのように論じられていたか。主なものを〈表2〉に挙げた。まず、1935年（昭和10）12月4日には、宗教団体法案綱領の要

点について論じられる中で、触れられている。その後は、社説を中心に「類似宗教」、あるいは「邪教」に関する論説がなされる。その直後、同年12月の大本教検挙の発生後は、論説が幾つも見られる。これらの事例を見て分かる通り、記事の論調からは、「類似宗教」をいかにして取り締まるか、ということが、主要な論点となっている。ここで指摘できることは、新宗教系の事件の続発の中で、その批判の手段として、「類似宗教」や「邪教」の用語が利用されていることである。新宗教＝「類似宗教」、「インチキ宗教」、「邪教」という民意形成には一定の役割を果たしたものと想像できる。一方、新宗教との関わりの中で、「迷信」の語が使用されることは少ない。

次章では、1936年（昭和11）に出版された「類似宗教」「迷信」等に関する書籍について、概観する。これらの用語は、どのような文脈で用いられ、どのような意味を付与されているのかについて触れる。

〈表2〉『東京朝日新聞』に見る、「類似宗教」、「迷信」、「邪教」関連の記事

年	月	日		見出し	記事より抜粋
1935	12	4		宗教団体 法案（綱 領）	五、淫祠邪教たるの故を以て取締る禁止、制裁の単行法規がない、最近の如く宗教復興の波に乗って各種のインチキ宗教が蔓延する現状に鑑み徹底的取締を為すことになった。六、類似宗教は今後届出ることとし、類似宗教も宗教行政の視野の中に入れ監督することとしたこと（新法案の要点より）
1935	12	8	号外	公安憂慮 の検挙	従来、の制度では宗教として神道、佛教、キリスト教以外は行政上扱ってゐない、大本教は警察だけで取締をしてゐるものだ、（中略）今度案を練つてゐる宗教団体法案によると、宗教類似の団体に対しては届出を命じて若し不穩のものであれば停止せしめることが規定されてゐる（高田文部省宗教局長談より）
1935	12	9		邪教取締 りを徹底 せよ	邪教ならずば淫祠、性教ならずば妄信のいかに世に流布さるゝかを思へば転に慄然たるものがある。（中略）従来、神道、仏教、基督教のみを文部行政上取扱つたのは制度上已むなしとしても、實際世の中に宗教的存在として横行せるものに対し殆ど無関心で過して来たのはどう云ふものか。（中略）この（宗教局）方面は、科学や常識で律し難き突拍子もなき迷信邪説の潜入し得る分野であり
1935	12	11		宗教、芸 術、学問 と人間	大本教の検挙が、宗教団体法案審議の初総会の直前にあつたことは、宗教団体法があれば、インチキ宗教が取締れるかの如き誤解を起し易からしめるのだが、文部当局の説明によつても、かくの如きは警察取締りに一任すべく、文部省によつては取締り得ないことを証明してゐるのである。即ち大本教が自らインチキ宗教と任ずるはずもなく、類似宗教として届出るはずもなく
1935	12	20		邪教撲滅 の件	人心の不安につけ込んで類似宗教が続出し中には信者から金を巻上げることのみを目的とするインチキ宗教と見られるものも少なくないので、何とかしてそれ等を掃出来ぬものかと各方面に淫祠邪教撲滅の要望が強くなったが、さて邪教征伐をやるとなると正邪の認定がむづかしく、（中略）内務省ではその取締りに悩まされた結果今日保安課に宗教係を新設し各府県警察部と連絡、類似宗教に対しては慎重なる取締を行ふことにした
1936	6	16		宗教界腐 敗の根幹	既成宗教団体の中においては管長を始め宗会議員選挙に際して買収並に増収助がほとんど公々然として行はれこれが既成宗教腐敗の一大原因をなしてをり又既成宗教のかゝる墮落が淫祠邪教發生の因をなしてゐる傾向があり、これは私的団体の私行為として見逃されてゐた

1936	6	28		邪教征伐 一石二鳥 策	人心不安の世相を反映してか（中略）インチキ療法も少なくないが一方これも最近各方面で問題となつてゐるインチキ宗教が信者吸集の手段としてインチキ療法をやつてゐるものが多いので内務省衛生局は国民保健の建前から新たに医療類似の行為取締規則を制定してインチキ宗教を一石二鳥の法律で徹底的に征伐することに決定
1936	7	11		既成宗団 と宗教の 発揚	監督官庁たる文部省の既成宗団革新の一契機となるべき形態を示す一方において、（中略）この社会的問題（物的、個々利益の追求の風潮）に乗じて、擬装の宗教は、さまよへる民衆の心身を捉へ、仮面の宗教家は、その陰険なる魔手を延ばすのである。（中略）国民精神作興に関する大詔渙発の十周年にあつて、全国教化運動の展開を計った仏教徒は、偶いはゆる仏教復興の氣運を迎へ
1936	9	8		特高課長 会議	七日午後の特高外事警察事務打合会では農村警察並に邪教取締に就き協議を重ねたが（中略）邪教取締に関しては国体明徴、皇室の尊厳高揚の二点より徹底的取締の必要があり現行法による取締には不備の点多いので類似宗教取締の単行法制定が強調されたが内務省当局では目下鋭意研究中なる旨答へた
1936	9	11		“魅力は 現世利 益”	（大本教、ひとのみち教団の事件を受けて）今後は全国警察部を督励し既成新興の全宗教団を通じて全面的監視を励行しいつれの教団を問はず不正事実に対しては峻厳なる摘発を試みて宗教界の革正を期することになったが一方文部省においても（中略）問題を重大視し宗教対策の確立を急ぐことになったが取り敢えずパンフレットその他の方法によって大衆の宗教的啓蒙運動に積極的に乗り出すことになった

7. 1936年における「類似宗教」論と「迷信」

1章で挙げた〈表1〉に見るように、「類似宗教」、「擬似宗教」関連の書籍が、1936年（昭和11）の1年間に相次いで出版されている。この事実から、当時の人々が「類似宗教」や「邪教」に大きな関心を持っていたことが推測できる。あるいは、民衆を啓発しようとする出版社側の意図もあったのかも知れない。特に大東出版社からは、多くの書籍が出版されている。同出版社は、創業者である岩野真雄が仏教による伝道を志したことに端を発する〔大東出版社〕ため、仏教者としての視点、少なくとも、反新宗教的視点が存在していたものと思われる。加えて、これらの書籍中において、「迷信」はどのような位置付

けをされていたのであろうか。結論から言うと、前章の新聞記事とは異なり、「迷信」が「類似宗教」との関わりの中で、盛んに論じられるという事実を指摘できる。以下、各書籍の出版された動機、及び「類似宗教」、「迷信」観について簡単に触れる。〈表1〉で示した通り、出版順に概観する。

(1) 仏教社会学院編、『新興類似宗教批判』

まず『新興類似宗教批判』における記述を挙げる。同学院は、冒頭でその目的を次のように述べている。

一、近時、社会不安、思想不安に乗じて、所謂新興類似宗教なるものの簇生甚だしく、これが厳正なる批判を果遂し、社会民衆をして其の帰趨を謬らしめざることこそは、現下急務中の急務であらう。(中略)

一、吾人は茲に、各講述並に執筆の諸先生に対して深く感謝の意を表すると共に、かうした批判的精神の普及発展によって、世の所謂邪教迷信が一掃され、撃滅されんことを希望して止まぬものである。〔仏教社会学院、1936年：1～2〕

同書は、いわゆる論文集であるため、「類似宗教」に対する一致した見解があるという訳ではない。しかし、冒頭の目的を見る限り、既成宗教に対する「類似」宗教と位置付けることができよう。一例として、椎尾弁匡による論文、「新興宗教批判」について触れる。椎尾は、当時流行していた「新興宗教」を既成教団のような公認宗教でないことから、「類似」と位置付け、「真の宗教と云ふに値せぬ埒もなき原始的な宗教運動が多い」〔椎尾、1936：9〕と評価する。そして、椎尾の論は「迷信」にも及ぶのだが、「迷信」、「邪教」が繁栄する原因として、医師や薬方の不足を挙げている。なお、椎尾は、以下に挙げる(4)にも寄稿している。

また、注目すべき点として、同書冒頭においてもそうであるが、掲載されている論文、全12本中4本の題名に、「邪教迷信」の語が使用されていることが挙げられる。「淫祠邪教」という語句は、新宗教批判において度々見られるが、同書では「迷信」と「邪教」が一連のものとして捉えられているのである。

(2) 島影盟、廣木勇郎、『現代人の見たる擬似宗教の真相』

同書の著者である島影と廣木は、同書の目的を「科学精神に立脚し、迷信排撃を目的として、擬似宗教の実質を明らかにすべく書かれたものである」〔島影、廣木、1936：1〕と規定する。そして、「擬似宗教」を「真正宗教に対する擬似、即ちその内実の邪惡的なものを指す」〔島影、廣木、1936：1〕定義し、行政上で用いられる、非公認宗教団体としての「類似宗教」とは相違している。

また、島影は、既に同年1月の段階で、森田書房より『邪教・妖術を裸にする』を著している。そこでは、「既成宗教の中でも、毛根のやうに一番活発に活動してゐる部分は、類似宗教的な、いひかへれば迷信的な方面であるといへる」〔島影、1936：51〕と論じており、「類似宗教」≡「迷信」という捉え方をしている。

(3) 中村古峽、『迷信に陥るまで：擬似宗教の心理学的批判』

中村は、心理学的立場から、天理教、大本教、ひとのみち教団などの新宗教系教団を批判する。同書を刊行する目的を以下のように説明する。

近年所謂擬似宗教なるものが簇々として各地に起り、大衆の無批判的な弱点に乗じて殆んど驚異的大發展を遂げた。而してこれが憂慮すべき社会問題となるに及び〔中村、1936：1〕

かくの如き所謂宗教屋（擬似宗教）の手に翻弄されて、迷妄のどん底につき落とされてゐる哀れむべき大衆を覚醒せしめ、一刻も早くかゝる迷信邪教を根絶せしめることは、識者の重大なる任務である。（中略）本書はこの目的のために、宗教と迷信との関係、擬似宗教の迷妄と欺瞞手段、並に一見した処では甚だ不可思議に見える変態心理現象等の解説を述べて、世の迷信打破の一助としたいと思ふ。〔中村、1936：5～6〕（括弧内は引用者による）

なお、同書は、「序」で中村本人が明らかにしていることであるが、自身の旧稿に序論を追加した形式となっている。中村は、以前より大本教について研究し、その批判を行っていた。

(4) 岩野真雄編、『仏教より観たる正信迷信の区別』

同書は、文字通り仏教、すなわち既成宗教の側からみた「迷信」批判である（編集者が岩野であることから明らかである）。各執筆者が、それぞれの仏教宗派の立場から論じており、「正信＝各宗派の教義」から見た「迷信」批判という体裁になっている。以下、冒頭における記述を引用する。

近年、日本の全土に亘って類似宗教の蔓延甚だしく、従って国民思想の上に、保健の上に、正しき精神の保持の上に非常な害悪を与へ（以下省略）

〔岩野、1936：1〕

また加藤精神は、「迷信」と「類似宗教」とを結びつけ、以下のように論じる。

若し彼等（新興、類似宗教）の祈願、振替等が、私利私欲の爲めに、徒に世福を求めんとするか、若しくは医薬を排除して、一切の疾病を祈願に依って全治すと誇張して、或は国家の禁令を犯し、或は社会の秩序を乱すが如きものならば、固より迷信であり、邪教である。〔加藤、1936：73〕（括弧内は引用者による）

(5) 戸坂潤、『思想と風俗』

同書では、当時の世相について述べているが、ここでは特に宗教に関する部分に注目する。

戸坂は、「公認宗教」と「類似宗教」との関係について、以下のように論評する。

大本教の検挙（中略）は類似宗教の邪教性を天下に公示したことになるが、公認宗教であって邪教でない筈の天理教が、教義と無関係に単に脱税行為だけが、検挙の目的となっていることは、公認宗教と類似宗教との区別が、単に事務的なものでないことを、即ち夫が社会的正義感や道徳的評価に直接関係しているということを、公示したことになる。〔戸坂、1977：414〕

このように、先に挙げた「公認」から「実態」へという、「類似宗教」概念の変容について分析を行っている。

また、「インチキ宗教」の範疇にも着目し、「新興宗教」や「類似宗教」の

みが「インチキ宗教」ではないと主張する。

宗教が「インチキ」であるかないかは、之を見る立場にある社会の常識的通念の如何によるものであって、社会の根本的矛盾に就いて本当の知識を有たない通念にとってインチキでない宗教も、社会の根本的矛盾を見得る通念からすると、紛れもないインチキ宗教なのである。〔戸坂、1977：420〕そして戸坂は、健全な宗教などは無意味であると述べる。

(6) 高津正道、『邪教新論』

高津正道は、反宗教的立場から新興諸宗教の批判を行っており、次のように述べる。

（既成宗教は、新興諸宗教の発展により、自らの権威を脅かされているものの）既成宗教の側からの「邪教論」には、決して同じてはならないのである。なぜなら、既成宗教こそ、支配階級と結ぶことにおいて、新興諸宗教より、より歴史的であり、したがって、より鞏固であり、この意味からは、一層批判解剖に値ひするからである。〔高津、1936：4〕（括弧内は引用者による）

高津の「邪教」論は、既成宗教によるものとは一線を画すものとなっている。

これらの書籍において共通することは、当時流行していた新宗教系教団を、「類似宗教」、「擬似宗教」、あるいは「邪教」の名の下に、批判、論駁していることである（宗教そのものを「インチキ」と見なす戸坂、及び反宗教的立場の高津の主張は趣を異にする）。その多くにおいて、これら新宗教が、「迷信」と関連付けて論じられていることは興味深い。

勿論、今回取り上げた文献は仏教系出版社によるものが中心であり、資料の選択は普遍性に欠けるものと言える。しかし、当時の「宗教復興」、「類似宗教打破」といった社会状況を鑑みると、先述の迷信調査協議会の活動の如き、戦後の「迷信」観、すなわち、「科学、合理性対迷信」、「迷信＝他者（都市対地方、現代対過去の対比の如き）の慣習」（これは人類学や民俗学の分野で頻繁に用いられる手法である）といった見方とは、質的に相違している

ことが指摘できよう。

8. まとめと考察

最後に、なぜ1936年(昭和11)という時期に、多数の「類似宗教」、「邪教」関連の書籍が出版されたのかという疑問について考察する。先述の通り、「類似宗教」の用語自体は、既に大正年代には成立しており、公権力による資料には度々登場している。その意味では、1926年(大正15)の第一次大本教事件の発生を受けて、「類似宗教」論が流行しても決して不思議ではない。1930年代中盤という時期に集中している必然性は、どこに求めるべきであろうか。

1930年代中盤は、友松圓諦を中心とした「宗教復興(仏教復興)」に伴い、宗教への関心が高まっていた時代であった。また、当時の文部大臣の発言、あるいは文部省公布の通牒に見るように、宗教への期待という要素があったことも見落とすことはできないだろう。

その一方で、1935年(昭和10)末には、大本教が、宗教事件としては初めて治安維持法の適用を受け、以後、新宗教関連の事件が増加した。更に翌年には、ひとのみ教団(=公認教団の傘下の教会)摘発のため、「類似宗教」か否かの基準が変容した。先に挙げた渡辺治〔1979〕の言葉を借りるならば、「公認か非公認か」という「形式」によるものから、「社会の安寧秩序を妨げるかどうか」という「実態」への変化である。当時の新聞記事から分かる通り、紙上には「類似宗教」、「邪教」の文字が多数登場し、新宗教関連の事件が大きな社会問題になっていた(意図的に社会問題にされていたとも解釈できる)。

「類似宗教」への「肯定的」と「否定的」という矛盾した要素に関連して、牧之内友〔2003〕は、次のような指摘を行っている。

文部省が「類似宗教」を宗教行政の枠内に取り込もうとするのに対し、司法省は、従来の「類似宗教」概念を変質・拡大させることで、取締対象ではなかったはずの神仏基(神道、仏教、キリスト教)の三教まで触手を伸ばしていることが明らかである。〔牧之内、2003:30〕(括弧内は引用者による)

すなわち、「類似宗教」理解について、文部省と司法省（加えて内務省）との間に温度差があり、どちらかと言えば前者が「肯定的」、後者が「否定的」であったと位置付けることができよう。この齟齬は、1940年（昭和16）の宗教団体法の施行以降も解消されなかったと、牧之内は主張する。

このような時代背景を顧みると、1930年代中盤は、「類似宗教」概念が大きく揺らいだ時期であり、「公認宗教」、「類似宗教」（＝非公認宗教）の区別が曖昧になった時期と理解することができよう。公認、非公認を問わず、各宗教団体は、きわめて不安定な状況下にあったと言える。

そして、今回取り上げた書籍を概観すると、「類似宗教」（あるいは「擬似宗教」）が「迷信」との関わりの中で、更に言えば、両者が不可分のものとして論じられていることが分かる。勿論、「類似宗教」ないし「擬似宗教」の語の定義は論者によってまちまちであり、必ずしも一定した見解は得られないことは、既に述べた。例えば、先の島影盟が主張する「擬似宗教」は、行政上の「類似宗教」が意味する、非公認の宗教団体とは異なっている。実体のない概念という点では、「類似宗教」も「迷信」も同様である。しかし、これらの流動的な概念が、以上に述べた社会状況の下で、新宗教系教団の批判の道具として、実体化されたのである。

以上の如き社会状況を考えると、大東出版社をはじめ、多数の「類似宗教」あるいは「邪教」関連の書籍の出版は、新宗教系書協団を「類似宗教」として弾劾する、プロパガンダ的な役割を担っていたと思われる。当時の「類似宗教」概念の揺らぎにより、公認宗教である仏教も、不安定な立場に立たされ、「類似宗教」、「迷信」批判のキャンペーンを積極的に展開しなければならないという事情があったのではないだろうか。結局、1939年の宗教団体法の成立により、「類似宗教」として扱われてきた諸宗教は、宗教結社として正式に宗教行政の俎上にのぼることとなるわけだが、このような運動も少なからず影響を及ぼしたものと想像できる。今回は「類似宗教」をキーワードに考察を進めたが、その中で、「迷信」の用語が、いわゆる「淫祠邪教」と並んで、新宗教批判の手段として用いられていたことは、注目に値する。いわば、「迷信」論における

時代特殊性と考えられる。

引用文献

井上恵行、1983年、「宗教団体法成立までの各種法案」、文化庁文化部宗務課編、
『明治以降宗教制度百年史』、原書房

井上恵行、1983年、「宗教団体法の成立から廃止まで」、文化庁文化部宗務課編、
『明治以降宗教制度百年史』、原書房

井上順孝、武田道生、1990年、「法との摩擦」、井上順孝等編、『新宗教事典』、
弘文堂

井之口章次、1970年、『日本の俗信』、弘文堂

岩野真雄、「はじがき」、岩野真雄編、1936年、『仏教より観たる正信迷信の区
別』、大東出版社

大谷栄一、2005年、「昭和初期の仏教ブーム」、国際宗教研究所編、『現代宗教』
2005、東京堂出版

奥平康弘、2006年（1977）、『治安維持法小史』、岩波書店

越智道順、1934年、『「宗教復興」論概観 附「宗教復興論」文献』（仏教法政
経済研究所モノグラフィー第10輯）、仏教法政経済研究所

加藤玄智、1912年（1905）、『宗教講話』、隆文館

加藤精神、1936年、「真言宗より観る」、岩野真雄編、1936年、『仏教より観た
る正信迷信の区別』、大東出版社

河原春作、1935年、「学校教育と宗教の關係に就て」、文部省調査局、『文部時
報』第544号、帝国地方行政学会

川村邦光、2006年（1990）、『幻視する近代空間 迷信・病気・座敷牢、あるいは
歴史の記憶』、青弓社

小関紹夫、1934年、「類似宗教団体の現勢とその分析」、『宗教研究』新第11巻
第6号

今野圓輔、1952年、「文化遺産と迷信」、迷信調査協議会編、『俗信と迷信』、技
報堂

- 座談会、1952年、「迷信をどう考えるか」、迷信調査協議会編、『俗信と迷信』、技報堂
- 椎尾弁匡、1936年、「新興宗教批判」、仏教社会学院編、『新興類似宗教批判』、大東出版社
- 島影盟、1936年、『邪教・妖術を裸にする』、森田書房
- 島影盟、廣木勇郎、1936年、『現代人の観たる擬似宗教の真相』、大東出版社
- 社会問題資料研究会編、1974年（1942）、『最近に於ける類似宗教運動に就て』（思想研究資料特輯第96号）、東洋文化社
- 宗教行政研究会編、1934年、『宗教法令類纂』、宗教行政研究会
- 高津正道、1936年、『邪教新論』、北斗書房
- 武田道生、1988年「天皇制国家体制における新宗教弾圧：新宗教淫祠邪教観をてがかりとして」、孝本貢編、『論集日本仏教史』9 大正・昭和時代、雄山閣
- 坪井正五郎、1898年、「妄信俗伝」、東京人類学会編、『東京人類学会雑誌』第13巻第150号
- 戸坂潤、1977年（1966）、「思想と風俗」、『戸坂潤全集』第4巻、勁草書房
- 中村古峽、1936年、『迷信に陥るまで：擬似宗教の心理学的批判』、大東出版社
- 日野寿一、1952年、「迷信の定義をめぐって」、迷信調査協議会編、『俗信と迷信』、技報堂
- 平生鈺三郎、1936年、「地方長官会議及勤労者教育協議会に於ける訓示」、文部省調査局、『文部時報』第554号、帝国地方行政学会
- 深谷善三郎、1939年、『宗教団体法解説』政府解説纂輯、中央社
- 仏教社会学院、1936年、「例言」、仏教社会学院編、『新興類似宗教批判』、大東出版社
- 牧之内友、2003年、「戦前期における文部省の宗教政策－「類似宗教」が「宗教結社」となるまで－」、北大史学会、『北大史学』43
- 真野俊和、1976年、「兆・占・禁・呪－俗信の民俗－」、櫻井徳太郎編、『信仰伝承』（日本民俗学講座3）、朝倉書店

迷信調査協議会編、1980年（1949）、『生活慣習と迷信』、洞史社

柳田国男、1934年、『民間伝承論』、共立社

渡辺治、1979年、「ファシズム期の宗教統制－治安維持法の宗教団体への発動をめぐって－」、東京大学社会科学研究所「ファシズムと民主主義」研究会編、『戦時日本の法体制』（ファシズム期の国家と社会4）、東京大学出版会

『東京朝日新聞』縮刷版、東京朝日新聞社（1935年12月～1936年12月）

<http://www.daitopb.co.jp/>（大東出版社のホームページ）

Theories on “Pseudo-Religions” in the Middle of 1930’s : With Special Reference to Those on “Superstitions”

Takashi ENDO

The aim of this paper is to consider theories on “pseudo-religions” in the middle of 1930’s in Japan through social contexts, paying attention to the idea of “superstitions”.

The term “superstitions” is a subjective one. Many scholars have studied it, and, in trying to define it, quoted definitions by other scholars, but only a few studies have referred to social contexts of these quoted definitions. Hence, I paid attention to social conditions in the middle of 1930’s, especially around 1936. For, at that time, theories on “pseudo-religions” were developed in relation to “superstitions”, and many books concerning “pseudo-religions” or “superstitions” were published mainly by Daito Publisher.

In Japan, the term “pseudo-religions” appeared in 1919, and were often used by the governmental authority. But, in the middle of 1930’s, the definition of it experienced a radical change. Until then, “pseudo-religions” meant ones which were not permitted ; now it meant ones which would disturb social peace and order.

As regards the period examined in this paper, following points were found out : (1) the hope on religions by the governmental authority, (2) the tide of “the Religious Revival”, (3) the enactment of “the Religious Group Law”.

It is already mentioned by other scholars that there were two contradictory attitudes toward religions : hope and caution. The Ministry of Education intended to accept “pseudo-religions” in the administration to cultivate people by religious education, while the Ministry of the Interior aimed to expand the interpretation of “pseudo-religions” to control religious groups.

Thus, the middle of 1930’s was the age, in which the idea of “pseudo-religions” was changing and a new definition was required. Under these social contexts, theories of “superstitions” developed as the propaganda against “pseudo-religions”.